

編集後記

編集長(ダン シロウ)

六冊目の完成。ますます増頁で、やや中年太り風かもしれない。もしダラダラした過剰さが目に付いたら、名指しでお知らせを。意味のある長さ、連載を心がけ、「この時代の資料に！」と考えている編集長は、執筆陣の拡大、増頁化は基本的に大歓迎。

でも、独り言のブログやHPの飛ばし書きとは一線を画しておきたい。だからご意見は歓迎です。

しかし今後もこの調子だと、早晚、街の電話帳くらいになってしまう可能性がある。現在、少部数作成して執筆者にお届けしている印刷版は出なくなるかもしれない。そうなったら執筆者とご相談。

WEBマガジンなのだから、多くの読者にはそれぞれプリントアウトしたり、モニター画面で読んで頂いている。たびたび書いたことだが、ipad（もしくは類似の新製品）で見るとなかなか良い感じだ。

ま、何も決まりはないので、これからも編集長が楽しいようにやっていこまっさ。

■■

『ノーサイド』（新しい首相が総裁就任演説で叫んでいたが）を連載開始した中村周平くんが「今回も写真掲載構いませんか？ご迷惑でなければ・・・」と遠慮気味に添付ファイルで送ってきた写真を見た。

“高校時代”と題された一枚。グラウンドでのスナップだろう。表情から不安、決意、気後れ、拳の意志・・・いろんな言葉が浮かんできた。

ユニフォーム姿の高校生の眼差しに私が

勝手に読み取ったのは、ここから始まる物語である。

この周平くんは、まだ自分の未来を知らない。それは今の彼も我々も同じで、誰も明日のことなど予言できない。

それは拡大すれば、地震や津波、原発、そして台風で被災した人たちも同じだ。

そして誰も、起きなかった昔に戻ることは出来ない。誰かにおきることが、誰かにおきる。だから、自分に起きるかどうかわけが問題なのではなく、誰に起きたとしても、それをどう受け止めるかが、社会全体に問われている。

天野忠詩集の中の短文にこういうのがある。連合軍が勝利し、ナチスドイツが崩壊した後のことだ。強制収容所・記録フィルムの街頭上映会がドイツ国内の津々浦々で行われた。ドイツ人の中には収容所のことを知らなかった者もあった。それを連合軍は全ドイツ国民に知らしめようとした。

上映会を後にした冬の夜の帰路。黙って歩く父子の頭上に雪が降り始める。息子が空を見上げながら、「あっ父さん、雪だ・・・」とつぶやく。

人はしばしば、何を語ればいいのか、途方に暮れる。しかしそんな時にこそ、語らなければならない。大したことなくて良い。自分の言葉精一杯の所を、そこにいる責任として口にしなければならぬ。

今がどういう時代なのか、渦中には分からないことがある。歴史になった頃に、はじめて明らかになる意味も存在するに違いない。マガジンがそう言う中の一つであると良いと思う。

■■

新連載の「ほほえみプロデュース活動奮闘記」は青森県の事業だが、計画される前から近くにおいて、動いてゆくのをずっと関心を持って見ていた。

世の中は一発イベントの繰り返ししかできない、二流広告代理店もどきの行政マンで溢れている。「ほほえみ」について、ある県の女性が、「うちでも、似たようなことをやっている」と話しているのを立ち聞きし

て、本当に分からない人はいつまで経っても分からないのだなと思った。

誰かの取り組みが、目先を変えた思いつき企画にしか見えていない者は、所詮そこ止まり。

意地悪な私はずっと昔から、「突然、素人が知った風なこと吹いて…。何でもかんでも、思いつきアイデアだとしか認識できない奴は、一生それだ」と冷ややかに見ていた。

事実、全国津々浦々に、なんやかんやの思いつき祭りの後の残骸が横たわっている。莫大な金とエネルギーがゴミになる。

あっという間に消えてしまう歌手や芸人をイッパツ屋と言って笑う人たちが、仕事でイッパツ屋でしかないことをしている。

「継続は力なり」というのは至言だ。続かないものを信じる必要はない。続くことなら何でも良いわけではないが、立ち消えになる多くのモノより、良くも悪くもどこか優れている。そういうモノだけが社会の資源や装置として生き残るのだろう。

■ ■

書くべき事のある対人援助現場にいる方。どうぞ編集長まで、新たな分野、角度からの連載打診をしてください。学会に入会していただく必要はありますが、このマガジン、基本的に全ての方に門戸を開いています。

編集員(チバ アキオ)

「水曜どうでしょう！」(北海道テレビ放送制作 バラエティ番組)がスキだ。今は全国区の大泉洋氏も、もとは地方タレント。北海道でトップになったから、全国区へのチャンスを得た。何かしら、極めようと思った時に、東京に行く、その領域のメッカに行くというのはよくあるパターン。でも、大泉洋氏の場合は異なる。地方局制作の番組がこれほど全国区というのは本当に珍しい。また、DVD、グッズ展開と、その企画のセンスもよい。京都でも「水曜どうでしょう！」ステッカーを貼った車両は毎日見かける。地方ががんばるといのは、今、

本当に大事なことだと思う。◆原発誘致も地方を元気に、地元を元気にということだ。始められたことだ。そこには都会と地方とのあらゆる格差の問題が根底にある。原発産業で地元にお金を落とすと考えるのか、そうではなく、他の手段で地元にお金を！と考えるのか？◆すると、いろんな人の汗が見えてくる。B級グルメもいとおしくなる。『長野伊那名物ローメン』、『秋田の横手焼きそば』なんかも最近いただいたな。◆あと、「ゆるキャラ」。こないだはパツとしないゆるキャラが、売れているゆるキャラに弟子入りし、ステージ・パフォーマンス等学んだりもしていた。このごろは、大手大学ではないところが大学のゆるキャラをつくって、大学間格差にも挑んでいる。◆世界遺産登録もしかりだ。小笠原諸島は週一回の定期便のみが交通手段。飛行場はない。だから、守られてきたものがあるといわれている。◆私の実家のある秋田県は、例にもれず過疎が進んでいる。秋田新幹線こまちの事を「秋田県脱出ポッド」といっているのも見かけたことがある。いろいろ考えてくると格差が全くなならないことは分かっている。それでも、私は私の身の回りの格差はできるだけ少なくしたいと思っている人間だ。◆資格を持っていない人は学んでいないのか？学会や専門職団体に属していない人たちには蓄積はないのか？自分たちの領域と、お隣の領域もみておくと違うでしょう！学歴は関係ないでしょう！…そんな差の是正を感じられることが、私にとってのこの対人援助学マガジンに関わっている理由でもあります。◆今回は、巻末座談会をたのしく、奔走しました。魅力ある方々と一緒にこうしたことができることは、本当にうれしいことで、私自身エネルギーをいただけることです。◆新連載も2本、またご一緒できる方が増えてうれしい限りです。

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想

danufufu@osk.3web.ne.jp

学会時にも販売しましたが印刷版対人援助学マガジン(1号、2号、各1000円、第3号、第4号、第5号1300円)が少数ですが編集部にあります。ご希望の方はメールでお知らせください。メール便で発送します。

マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町438
ランプラス二条御幸町402 仕事場D・A・N

対人援助学マガジン 通巻6号

第二巻 第二号

2011年9月15日発行

<http://humanservices.jp/>

対人援助学会事務局

〒603-5877 京都市北区等持院北町56-1
立命館大学大学院応用人間科学研究科内

TEL:075-465-8375 FAX:075-465-8364

対人援助学会事務担当

入会・退会・変更届

〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1

リファレンス内

TEL/FAX 学会専用:06-6910-0103

表紙の言葉

旅が好きです。唯一の趣味と言っているかもしれませんが。バックパッカーも、団体旅行も、妻と二人の旅も、一人旅も、どれも楽しめます。「街」が好きで自分の歳に合う旅の仕方をしてきました。

日本国内は、ほとんどの都道府県に仕事で出かけるので、気分転換は必然的に外国になります。

積極的に観光がしたいわけでもないので、どこかに行かなければならないような旅はしません。あてが外れたり、修復中だったり、その日は閉まっていたりもしょっちゅうです。窓口では「また来ればいいか…」と呟くのですが、大抵は二度と行きません。それよりもまだ知らない所を散歩するのが楽しいので。

秘境へ行こうとか、冒険しようとかいう気持ちもなくなりました。せいぜい、「珍しいところに行ってますね」といわれる程度の目的地選択です。

ヨーロッパの鉄道は三〇年以上前からお気に入り、トマス・クック時刻表片手に、あちこち鉄道を巡りました。「世界の車窓から」は、私のために用意された番組のようで、DVD化されてシリーズ発売されているものは、現在も継続購入中です。

リュブリャーナ(スロベニアの首都)なんて、あまり行ってる人は少ないでしょう。それどこ? って方も多いかもしれません。イタリア北部に隣接した小国。クロアチアの手前って、説明になっていませんね。綺麗な小都市でした。旧ユーゴスラヴィア内戦が終わって、平和を満喫する国民の表情が、本当に明るいいい街でした。

妻が回復したら、まだ見ぬあちこちの街に出かけなければと、今のところ待機中です。

2011/09/15 団士郎